

# 運動部活動論再検討序説： 佐藤の体育の概念規定に依拠して

内 山 須美子<sup>1</sup>・佐 藤 由 梨<sup>2</sup>

## An Introduction to a Re-examination of Activity Theory in Athletic Club: Building on Sato's Concept of Physical Education

Sumiko Uchiyama<sup>1</sup>・Yuri Sato<sup>2</sup>

In this study, considerations were made with the purpose of investigating the nature of athletic club activities based on Sato's concept of physical education. As a result, although physical education and athletic club activities are both practical physical education with the existential purpose of "humanization of the physical side of mankind," it was revealed that it takes a completely different practical form. In addition, it was understood that as for the essence of athletic club activities, students "get used to" exercise cultures such as dance and sports, as well as "advance" in sports as an opportunity to "rise" to further heights. Two directions concerning methods for athletic club activities were revealed.

## 1. 緒言

### 1-1. 研究の背景と目的

朝日新聞では、昨年の4月から5月にかけて、5回に亘る運動部活動の特集記事を組んでいる。このような社会的関心の高さは、なかなか解決されない運動部活動の問題によるものである。体罰、しごき、勝利至上主義、顧問教師の過重負担、スポーツ障害など、思いつくままに数え上げても、

---

<sup>1</sup> 白鷗大学教育学部 Faculty of Education, Hakuoh University

<sup>2</sup> 太田市立九合小学校 Ota Civic Kuai Elementary School

e-mail: uchiyama@fc.hakuoh.ac.jp

それは多岐に亘る。中西は、「学校教育の一環として、教育課程との関連が図られ」（文部科学省、2008、p.170）ながら行われるべき青少年の運動の機会において、これほど多くの問題が噴出する原因は、運動部活動がシステム外部との相互連携なく維持されるその「閉鎖性」にあるとし、それ故、その解決には、システムを地域に開放する必要がある、スポーツ振興基本計画に謳われている総合型地域スポーツクラブの全国展開が、運動部活動に良い意味での変革をもたらすとして、「閉鎖系」から「解放系」へのパラダイム変換を提案している（中西、2009、pp.39-56）。しかしながら、これまでの運動部活動の歴史の中で、何度も「地域移譲」が提案されながら未だに実現の道を見出せないのは、運動部活動が生徒指導面での大きなウェイトを占めるからであり、学校現場が、子どもたちの人格形成に寄与する教育的機能を手放せないからではないだろうか。

我が国の運動部活動は、学制の発布と時期を同じくして、スポーツを教育に位置付けたところから始まり、様々な問題を抱えながら「学校教育の変化と連動して」（中澤、2011b、p.59）継承され続けてきた。運動部活動が学校に基盤を置いたことの是非はともかくとして、運動部活動の人間形成機能に対する期待は極めて強く、時代を超越したものがあると思われる。もはや、教育的機能を抜きにして運動部活動の機能を語ることはできないのではないか。あくまで、教育というシステムの中で、その方向性を見出すことが運動部活動に課せられた喫緊の課題であると思われる。

## 1－2．先行研究の検討

運動部活動が教育課程外に位置付けられていることから、教育学の領域で研究が少なく、その多くは体罰を始めたとした運動部活動の問題を扱ったものに偏っている（中澤、2011c、pp.32-33）。これらの諸問題に対し、文部科学省は、「体罰の根絶」を喫緊の課題として捉えているとともに、1）運動部活動での効果的、計画的な指導に向けて、2）実際の活動での効果的な指導に向けて、3）指導力の向上に向けて、の3つの視点から今後の

運動部活動の方向性を述べている。しかしながら、「生徒の主体性を尊重しつつ、各活動の目標、指導の方針を検討、設定すること」（文部科学省、2013、p.9）、「顧問の教員同士で共同して研究したり、研究成果を情報共有していくこと」（文部科学省、2013、p.16）など、運動部活動を正しく安全に運営する上での考え方は示すものの、具体的な方策は示されていない。また、日本体育協会は、「学校運動部活動においても、外部指導者として有資格指導者の果たす役割はますます重要になってきている」（日本体育協会、2004、p.10）として、指導者資格の取得を促すに止まっている。さらに、各都道府県教育委員会が示すガイドライン、リーフレットに関しては、「体罰の根絶」に関する施策が目立っているとともに、1）運動部活動の変遷や在り方、2）運動部活動の運営と指導Q & A、3）運動部活動関係の事故判例や事例などがまとめられているものが多い。その内容を表1に示した。しかしながら、どのように運営し、指導すれば運動部活動が充実・発展するのかといった具体策を見出すまでには至っていない。

表1. 各都道府県教育委員会が示すガイドライン及びリーフレット

北海道	○ 学校教育指導資料 望ましい指導の在り方－体罰の根絶を目指して－北海道教育委員会
青森県	△ 体罰のない学校づくりのために（教職員用リーフレット） 青森県教育委員会
秋田県	○ 学校教育活動における運動部活動の在り方について（改訂版） ～運動部活動指導の手びき～ 秋田県教育委員会
岩手県	△ 平成26年度岩手県運動部活動指導者研修会 運動指導メニュー 岩手県教育委員会（講義等を行っているが、全体の指導書はない）
山形県	○ 体罰等の根絶と児童生徒理解に基づく指導のガイドライン ～信頼される学校教育を推進するために～ 山形県教育委員会
宮城県	○ 「子どもの心に灯をつける」運動部活動の指導－体罰の根絶に向けて－ 宮城県教育委員会
福島県	×
群馬県	○ 中学校・高等学校運動部活動指導資料 群馬県教育委員会
栃木県	△ 運動部活動指導者ハンドブック－逞しく生きる力の育成を目指して－ 栃木県教育委員会（平成24年作成）
茨城県	○ 望ましい運動部活動の在り方（三訂版） 茨城県教育委員会
埼玉県	○ 運動部活動指導資料（改訂版） 埼玉県教育委員会
東京都	△ 部活動顧問ハンドブック－児童・生徒の充実した学校生活の実現に向けて－ 東京都教育委員会（平成19年）
神奈川県	△ 部活動指導ハンドブック 神奈川県教育委員会（平成23年改訂） ○ かながわ部活ドリームプラン21 version Ⅲ

千葉県	△	安全で充実した運動部活動のためのガイドライン 千葉県教育委員会（平成24年改訂）、体罰根絶宣言
新潟県	×	
長野県	○	運動部活動指導の手引き（平成22年）
山梨県	○	運動部活動のガイドQ&A
静岡県	×	
石川県	×	
富山県	○	運動部活動運営の手引き
岐阜県	○	これからの運動部活動（改訂版） 運動部活動をめぐる学校・保護者・社会人指導者の役割と連携 ～岐阜県の現状を踏まえて～
愛知県	×	
福井県	×	
滋賀県	○	運動部活動の指導について《改訂版》
三重県	△	運動部活動等における体罰等の防止について（体罰に特化）
京都府	○	運動部活動指導ハンドブック
奈良県	△	部活動指導の手引き（奈良県教育委員会）※言葉は出てくるが詳細不明
兵庫県	△	いきいき運動部活動（発行年不明）
大阪府	○	みんなが主役！運動部活動～自主的、主体的な活動で上手になろう～
和歌山県	○	運動部活動指導の手引「大切なことは何か？効果的な部活動を目指して！」
鳥取県	○	子どものスポーツ活動ガイドライン スポーツに取り組む子どもたちと共に
岡山県	○	運動部活動資料（岡山県教育庁）
鳥根県	×	
広島県	△	魅力ある運動部活動の在り方（平成22年）
山口県	△	よりよい生徒指導に向けて第Ⅱ章 場面指導事例【部活動編】（平成23年改訂）
香川県	×	
徳島県	○	運動部活動指針
愛媛県	△	運動部活動運営ガイド（平成23年）
高知県	○	運動部活動全体計画ハンドブック 一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して
福岡県	○	福岡県運動部活動運営の指針
大分県	△	「運動部活動指導の手引」運動部活動の在り方～安全・安心の確保のために～（平成22年2月）
宮崎県	×	
佐賀県	×	
長崎県	○	運動部活動指導の手引
熊本県	○	概要版 運動部活動の手引
鹿児島県	△	運動部活動指導の手引（改訂版）－感動・夢・希望を与えるために－（平成22年）
沖縄県	○	体罰防止ハンドブック 体罰の根絶と児童生徒理解に向けて ～教職員のさらなる指導力の向上を目指して～

○：文科省ガイドラインが示された後に作成 △：文科省ガイドラインが示される前に作成 ×：作成なし

一方、「スポーツは民主主義の基盤の上に発達した」（中澤、2014、pp.20-21）にもかかわらず、最も大切な子どもの自主性がないがしろにされてい

ることを危惧するのが中澤である。そもそも、スポーツとは身体を使った一種の「遊戯」であり、「学校教育は、スポーツが持つそうした遊戯の性質と相容れない側面を持つ」（中澤、2014、p.17）のであるが、そのような矛盾があったとしても、教育において本来保障されなければならない「自主性」という教育的価値と理想を、現状の運動部活動にどう見出していくかという問題提起をしているのである。この問題のひとつの答えとして、「自治」という概念を提案しているのが神谷である。教師が生徒の自主性に関与するのではなく、自主性そのものを生徒に委ねてしまおうとする思考枠組みの提案である。つまり、生徒たちが「誰かがつくった枠組みに自ら治まるのではなく、自らが治める活動へと転換していく必要がある」（神谷、2016、p.34）と考え、運動部活動の諸問題に生徒の「自治」を適用することで、1）生徒の自発的な活動を確保することができ、生徒たちが好きなスポーツの魅力を見出すことが可能になる、2）教師の一方的な勝利至上主義の部活動運営から、生徒が望むより良い部活動運営を実施していくことが可能になる、3）教師は、運動部活動の専門家でなくても、生徒の活動を見守り、支えていく顧問としての活動が可能になるなど、運動部活動のいくつかの問題を解決できるとしている。

一方、友添らは、1）目指すべき運動部活動の意義、2）運動部活動の安全対策と事故対応、3）運動部活動の指導に活かすスポーツ医科学、4）運動部活動を豊かにするマネジメントの4つの視点から、目指すべき運動部活動の在り方に迫ろうとした。友添が、「心身の盛んな発達期にある生徒にとって、同じ目的を共有しながら、濃密で長い時間を運動やスポーツを通して、集団で生活をともにすることは彼らの身体的発達のみならず、人格形成のうえでも多大な影響を及ぼす」（友添、2016、p.2）と述べていることから窺えるように、友添は、運動部活動は運動集団を媒介としながら、技能習熟や技能達成を目指して人格を陶冶する契機を内包した、人間形成にとって欠くことのできない貴重な経験を提供できる「場」を有すると考えており、その前提のもとに各論が展開されている。

### 1－3．研究の目的と方法

運動部活動に関する様々な問題に対する政策とこれからの運動部活動の在り方に関する論考を検討した結果、運動部活動がどうあるべきかを「帰納的抽象」によって解こうとしたこれまでの理論は、抽象、確定されるべき「運動部活動」という存在を先行的に知っていなければならないという論理的矛盾を抱えている。したがって、混沌を極める現下の状況を超克するには、運動部活動という名辞自体を考察しなければならない。要するに「理念性（本質性）の領野を必要とする」（ポンティ、1967、p.14）のである。運動部活動とは何か。このような根源的な問いかけを抜きにした考察が提示する解決策は、その表層的な即効性とは裏腹に、理論的に重大な脆弱性を抱えているが故に、実践においても、その理解の深さが問われねばならない陥穽に陥ることを免れない。

そこで、本研究では、運動部活動の「いつでも的」な存在の普遍的規定、換言すれば運動部活動の本質を究明することを目的とする。その際、佐藤の体育の概念規定に基づいて分析を行う。教育とは「能動—受動」といった「関係性」を本質とする事象であり、何かそれ自体として存立するような「実態概念」ではないことから、教育（Education）を、 $E=f(a, b, c|P)$ と定式化し、その上で「体育=身体教育（Physical Education）」という原義に立ち戻って吟味する中で、佐藤は、体育を $PE=f(a', b', c'|P')$ と定式化した（佐藤、1993、pp.214-218）。すなわち、PE（体育）とは、設定された目標（P）の条件下での、a'（作用項）、b'（被作用項）、c'（媒体項）それぞれを独立変数とする従属変数（ $f$ ＝関数）と捉えられる。例えば、被作用項の対象が小学生か、年配者かで、関数としての体育はその存在様態が変化する。したがって、a'（作用項）、b'（被作用項）、c'（媒体項）を、それぞれ、指導者、生徒、運動文化（スポーツ種目）と特定し、体育の目標（P）は何かを検討することで、体育活動としての運動部活動の本質が導出できると考えられる。

## 2. 体育の目標

佐藤は、人間と体育（身体教育）の結びつきが人間存在の生物学的条件そのものに起因することを実証したポルトマンの洞察を振り返ることで、「ヒトの人間化<sup>注1)</sup>」を教育の実存的目標として、「ヒトの身体面からの人間化」を体育の実存的目標として定立することができるとしている。ポルトマンが看破した「生理的早産」<sup>注2)</sup>からすれば、ヒトの未成熟なからだは他者からの働きかけを介在させつつようやく「身体化」に向けて出立し、絶え間ない周囲との社会的接触の中で驚くべき身体能力を顕現化する。生誕時に我々のからだは未成熟であるのは、他の動物のように特定の環境にのみ適合するような特殊化が進行しているのではなく、人間世界で生まれ落ちた人間の生活世界で必要とされる複雑で多岐にわたる運動能力を、他者との関係において身につけていく「可塑性」を保証しているということであり、これが、「ヒトのからだの身体化」に対する「体育<sup>注3)</sup>」のかかわりを必然的なものにするのである（佐藤、1993、pp.231-237）。ヴィクトール<sup>注4)</sup>を持ち出すまでもなく、人間としての身体が形成されるにあたっては、体育という機能が決定的な役割を果たすのであり、その意味で、どのような時代、場所においても人間の存在様式そのものが体育を要請すると言える。以上のことから、佐藤は、「からだから身体へと変容させる教育機能こそが、要するに我々の体育に他ならない」（佐藤、1993、p.174）と結論付けるのである。

続けて、佐藤は、実存的体育という概念的位相は抽象度が高いが故に、その目的契機も「ヒトの身体面からの人間化」という、抽象的なそれに止まっており、我々が、実際に顕現化しなければならない運動的身体能力は、特定の種目における特定可能な具体的運動能力であると述べている。体育で身につけようとする運動形式は、佐藤によれば「象徴的運動形式」のカテゴリーに属し「自己展開的」且つ「改良技術的」であることを特徴とする（佐藤、1993、p.250）。体育の授業や運動部活動が対象とするこの象徴的運動形式とは、習慣的な反復に留まらず、不断の更新を志向してお

り、これまでダンスやスポーツの分野で膨大な身体技法として蓄積されてきたし、今後も更新されて拡大、高度化されてゆく。これらを媒体項 (c') としつつ、それぞれの種目の独自性を身体面から維持することが、制度体育の目的契機 (P') となる。

したがって、制度体育は「運動形式の伝承」をその機能としているのだが、こうした文化伝承が可能となるには、文化の担い手としての個人の能力が前提となる。人間の努力が生み出してきた文化ではあるが、それを再度身につけるには再び努力が必要だということである。要するに、実存的目標の「人間化」とは、自分を生み出してくれた「自然」と自分が生み出した「文化」双方からの二重の超脱を意味することになる (佐藤、1993、pp.237-253)。人間がこれまでに創造してきた膨大な「疎外態」としての「運動形式」を再び個々人における具体的な身体能力として顕現するには、我々にとって身近な「体育実践」を必要とする。それ故、それを身体能力として顕現化することは、必然的に被作用者をして所与として潜在する運動文化の「特殊性への馴致」へと至らしめる。そのためには、どうしても作用項 (教師) の被作用項 (生徒) の教育によって現状からの超脱を目指さないことには、疎外態としての運動文化を身につけることはできない。したがって、運動文化と人間のかかわりにおいては「特殊性への馴致」と「さらなる高度化を目指しての現状からの超脱」という二つの様態が看取されるのである (佐藤、1993、pp.252-285)。

こうして、佐藤の体育の概念について検討した結果、体育の目標は、実存的体育においては「ヒトの身体面からの人間化」、制度体育においては「運動文化の身体面からの継承」、体育実践においては「個々人における可能的身体諸能力の顕現化」であることが理解された。体育実践は制度体育による制約のもとにあるが、その制度体育はさらに実存的体育の制約のもとにあるので、結果的には、個々の体育実践もまた「ヒトの身体面からの人間化」という実存的体育の目標に制約されていることになる。運動部活動も体育過程の一つであることから、これらの目標の下に実践が行われな



ければならない。佐藤によって明らかにされた体育概念における目的を纏めて表2に示した。

表2. 体育概念における目的

実存的体育	ヒトの身体面からの人間化
	(目的)
制度体育	運動文化の身体面からの継承
	(目的)
体育実践	個々人における可能的身体諸能力の顕現化

### 3. 二つの体育過程

以上のように、体育実践の目的を明らかにすることで、同時に運動部活動の目的を明示することはできたが、ここで、二つの体育過程を区別しておかなければならない。教育学における「普通教育（職業教育や専門教育でなく、国民が一般に受けるべき基礎教育）」と「専門教育（一定の職業人あるいは専門教育者を養成する教育）」の概念の区別から、佐藤は、体育の個別相における実践過程である「体育過程」に「普通体育」と「専門体育」という2種類の型を見出し、前者は人間能力の基礎的で広範な可能性の顕現化を、後者は特定分野や領域の専門化、高度化、深化を、それぞれ目指すものであるとして明確に区分している（佐藤、1993、pp.285-297）。このように、体育の実践過程を「普通体育」と「専門体育」とに区分するとしたその前提には、「あらゆる文化は、具体的な個々人の能力を媒介としない限り伝承不能なのであって、こうした事情は、運動文化の場合も、全く同様である」（佐藤、1993、p.287）という基本認識のもと、運動文化と身体能力との明確な関係性がある。それは、「専門体育」とは、「普通体育」が「運動文化が被作用項における新たな身体能力顕現化のための媒体項として位置づく」のとは逆に、「運動文化が、優れた身体能力を媒介

することによって、さらに運動文化として伝承・発展していく」という事態である。

佐藤によれば、身体能力をA、運動文化をBとしたとき、この文化伝承過程の中に、二種類の型を見出すことができる。〈A→B→A'〉および〈B→A→B'〉の二型である。〈A→B→A'〉の場合、既存の身体能力〈A〉が運動文化〈B〉を媒介として能力を新たに顕現化して身体能力〈A'〉に変容したことを意味する。これが、普通体育における体育過程である。一方、〈B→A→B'〉の場合、運動文化〈B〉が、優れた身体能力〈A〉を媒介することで、さらに運動文化〈B'〉として伝承・発展していくという事態を表している。スポーツや舞踊といった複雑かつ高度な技術性を内在する運動文化はこうした専門的な営みによってのみ、その水準を維持・発展できる。先の〈A→B→A'〉とはちょうど逆の関係になる〈B→A→B'〉の体育過程を我々は専門体育と呼ぶ。この普通体育と専門体育に照らし合わせると、教科体育が〈A→B→A'〉という型の普通体育に、運動部活動が〈B→A→B'〉という型の専門体育に該当するものであることは、容易に看取される（佐藤、1993、pp.287-289）。佐藤によって導き出された二つの体育過程の相違を纏め表3に示した。

表3. 普通体育と専門体育の体育過程

普通体育 (教科体育)	<p style="text-align: center;">＜手段＞</p> <p>A 身体能力 → B 運動文化 → A' 身体能力</p>
専門体育 (運動部活動)	<p>B 運動文化 → A 身体能力 → B' 運動文化</p> <p style="text-align: center;">＜手段＞</p>

以上の佐藤の言明から、教科体育の目的は、運動の「多様性」の追求ということになるが、一方、運動部活動の目的は、運動の「高度性」の追求ということになる。教科体育と運動部活動の目的の違いを纏め表4に示した。

表4. 普通体育と専門体育の目的

普通体育	⇒子どもたちのどんな可能性を引き出すことができるか
(教科体育)	目的：運動の「多様性」の追求
専門体育	⇒特殊な身体技法への馴致
(運動部活動)	目的：運動の「高度性」の追求

佐藤は、課外体育は、基本的には〈B→A→B'〉型の体育実践であり、したがって、この実践は教科体育の実践に取って替わり得るようなものではないことを、我々、体育にかかわる者は深く自覚しなければならないと述べている。

#### 4. 体育教師と運動部活動指導者

教科体育と運動部活動（課外体育）を区別して理解することは、「教師」と「指導者」の峻別という問題の解決にも自ずと繋がることになる。わが国では、専門体育の体育過程を実践する場である運動部活動と普通体育の体育過程を実践する体育の授業とが混同され、実践上様々な混乱（あるいは好都合な事態）を招いているのも、両者は全く別の実践形態をとらねばならないことが看過されているからである（佐藤、1993、p.297）。すなわち、「体育教師」は、普通体育の過程、つまり、運動文化を媒体にして新たな身体能力の顕現化を目指すのに対し、「運動部活動指導者」は、当該スポーツ種目における複雑で高度で且つ特異な身体技法の獲得とその超越を可能にさせることで勝利を目指す。故に、教科体育で教師が考えなければならないのは、その運動教材によって、生徒のどのような身体能力の可能性を引き出し複雑かつ高度な身体技法の獲得をいかにして合理的に可能にするかということである。一方、運動部活動で獲得すべき身体技法は、特定種目の高度化を目指す専門体育の範疇に属する性格を帯びたものとして蓄積されているので、運動部活動の指導者が考えるべきことは、個々のス

スポーツの持つ特殊性に生徒を馴致させることであり、そこから、いかにしてさらに高みへ超脱させ、成長させるかということである。

こうして、運動部活動の指導者は、生徒を先導する先導者でなければならないことになるが、教育の対象とする生徒とは、佐藤が、プラトンの「洞窟の比喻」<sup>注5)</sup>を例として示した通り、自ら一人では目的に到達できないばかりか、それがどのようなものであり、どこにあるかも知らないことをその存在様態とする。つまり、「洞窟の住人」としての生徒たちは、手足を縛られた状態で動くことも振り返ることもできない状態に置かれており、教育が施されなければいつまでもそのようにして、たとえ、教育が施されたとしても、途中で嫌になればいつでも元の何もしないで楽に暮らせる場所に戻ってしまう性向を持つ。佐藤によれば、こうした性向から生徒を解放するためには、指導者の働きかけによる身体ごとの「向け変えperiagein」を必須条件とする（佐藤、1993、pp.271-276）。「向け変え」が、 $PE=f(a', b', c'|P')$ における「作用項 (a')=運動部活動指導者」による働きかけを契機とする以外にない以上、それは、洞窟の住人たる「被作用項 (b')=生徒」にとって、外発的な「強制」<sup>注5)</sup>として立ち現れて来ざるを得ない。「教育とは、まさにその器官を転向させることがどうすればいちばんやさしく、いちばん効果的に達成されるかを考える、向け変えの技術 he techne tes periagoges にほかならない（プラトン、1978、518C-D）」のである。生徒を高みに向けて「向け変える」となれば、指導者は相当の指導力（プラトンが言うところの「強制力」（プラトン、1978、526B））を必要とする。持続的で創意工夫に満ちた訓練（トレーニング）に精通していなければならないし、技術や戦術という知的能力の行使の仕方に熟知していなければならない。更には勝利という目標を実現するうえで、何が正しくて正しくないのか、その是非の決定に不可欠な「価値」にかかわる能力である「感性」<sup>注6)</sup>にも優れていなければならないだろう。運動部活動指導者に求められる資質は教師のそれとは全く異なるものであると言わなければならない。

以上、これまでの考察を纏めるなら、運動部活動の指導者の一義的な役割とは、生徒を、当該種目の身体技法の体系に「馴致」せしめ、次に、絶えず現状から「超越」せしめて新たな次元のパフォーマンスを通して勝利を実現することにある、と言える。そして、運動部活動の指導者とは、絶えざる超越の実現に向けて「強制力」を行使することを本質とする、と結論づけられる。ただし、その場合の「強制力」とは、「管理教育」とは本質的に全く逆であって、「何等かの特定の条件に合致させるため、あるいはあらかじめの取り決めごとから逸脱させないために統制しようとする」のではなく、むしろ、生徒を「現状から超脱」させようとする、彼らの成長を促す誠に困難な営みなのである。

## 5. 運動部活動の本質と指導者の役割

佐藤の体育概念の規定に基づいて運動部活動の概念を検討した結果、我々は、まず、体育を「関係概念」として捉え、体育の目標を明らかにすることで、運動部活動の本質を抉出することができるだろうとの推測を持った。その結果、実存的体育においては「ヒトの身体面からの人間化」、制度体育においては「運動文化の身体面からの継承」、体育実践においては「個々人における可能的身体諸能力の顕現化」が目標であり、個々の体育実践は全て「ヒトの身体面からの人間化」という実存的体育の目標に制約されていることを導出することができ、運動部活動も体育過程のひとつとして位置づく以上、これらの目標に制約を受けることを明らかにできた。運動部活動とは、ダンスやスポーツといった運動文化への「馴致」とさらなる高みへの「超脱」を目的とした活動であり、ヒトの身体面からの人間化を実存的な目的とする体育実践である。

また、教科体育と運動部活動（課外体育）は全く別種の実践形態をとらねばならないのであり、そのことから、専門教育として位置づく運動部活動の指導者は、目標の実現に向けて、生徒を当該種目の身体技法の体系に「馴致」せしめ、次に、現にそこでプレイするレベルを不断に相対化させ、

絶えず現状から「超越」せしめる役割を持った専門職であることが明らかとなった。このことから、運動部活動の指導者は、勝利やその他の価値のために「強制力」を行使することで、生徒を現状から解き放ち成長させる人である、と結論づけられた。教科体育と運動部活動が異なる体育過程であることから、体育教師と運動部活動指導者が担う役割、求められる資質も、また異なるものであると言わざるを得ない。

## 6. 運動部活動の方向性

これまでの考察で明らかになったように、教科体育と運動部活動は、「ヒトの身体面からの人間化」という同じ目標の下にありながらも、別個の体育過程である。それ故、その概念通り、運動部活動の最も妥当な方向性はスポーツの高度化である。教育現場が各運動部活動に専門性に優れた指導者を準備できないならば、学校と地域、行政が連携して運動部活動を運営していく必然性がもたらされる。実際、いくつかの実践例があるが、八木がそのモデルの一例として示している「JFAアカデミー福島」（八木、2007、pp.56-59）のような学校外で進行する競技力向上の実践は、主に競技団体が主体となって行うエリートプログラムとして位置づけられるであろう。2000年に文部科学省によって出されたスポーツ振興基本計画では、地域におけるスポーツの拡充と国際競技力の向上が社会的要求として示され、それ以降、総合型地域スポーツクラブの普及、スポーツ統括組織による学校外での競技力向上対策が本格化し、若年層の中心的競技力向上拠点は徐々に学校外に移されようとしており、このような取り組みによって、科学的トレーニングが運動部活動における競技力向上の前提となることが期待できると同時に、戦前に国家主義教育の中心的位置付けにあったエリート校の教育とむすびついて培われた修養主義的スポーツ実践から解放されることが期待できる（八木、2007）。しかしながら、八木も述べるように、学校運動部を始め地域のクラブに、競技団体が作成する一環指導プログラムが浸透するのか、育成拠点の不足が原因となって起こる教育責任の問題をど

うするかという懸念はぬぐい切れないのであり、何よりも、スポーツ格差発生の懸念、学校運動部の教育的性格の維持、競技団体による学校運動部への介入による競技力向上の過熱は、最も懸念されるべき事項であるだろう（八木、2007）。このような懸念が是正され、それなりの環境が整うには課題も多く、今しばらく時間を要するだろうと思われる。

一方、教科体育と運動部活動はそれぞれ別個のものと認識しなければならないにもかかわらず、なんとか中庸の道を探ろうとする方向性も考えられる。例えば、人間形成等、運動部活動参加の効果を謳うことで教育的性格を強調することはその一つの方法と言えるだろう。しかしながら、運動部活動の本質的な機能は生徒の身体への働きかけ（人間化）であり、人格形成は副次的産物ではあっても、その本来の目的にとって代わることはできない。また、運動部活動参加が人格形成にポジティブな機能・効果を持つとは限らないことを示した研究も少なくない上に、運動部活動参加が、成績の低下、反社会的な逸脱といったネガティブな機能・効果を持つ場合もあることが示されており、結局のところ、運動部活動参加が人間形成や教育的・職業的・社会的達成に対していかなる機能・効果を持つのかは未だ明らかになっていない（中澤、2011c）のが現状でもある。

また、中村は、『『スポーツの論理』を『教育の論理』に優先させていることがいわゆる部活『問題』を生んでいる』（中村、1995、p.159）と指摘し、運動部活動はスポーツの論理よりは教育の論理を重視しなければならないと提案している。表3に示したように、普通体育（教科体育）は、 $\langle A \rightarrow B \rightarrow A' \rangle$  型の体育実践であり、運動文化、つまり、スポーツ種目を手段として生徒の身体能力の可能性を引き出すことが目的であった。一方で、専門体育（運動部活動）は、 $\langle B \rightarrow A \rightarrow B' \rangle$  型の体育実践であり、身体能力、つまり、生徒を手段として運動文化をさらに発展させていくことが目的であった。しかしながら、このような区別を一旦保留し、運動部活動においても、教科体育と同様に生徒の身体の多様な可能性を顕現することを目的として、運動部活動を教科体育の延長上に置くことで、自主性の保障や体

罰などの行き過ぎた管理による問題を引き起こすリスクが軽減できるのではないかと考える方向性である。

先述した通り、神谷は、運動部活動の諸問題に生徒の「自治」を適用することで、これらの問題を解決できる可能性を示している。運動部活動は生徒主体の活動として、生徒が自分たちの責任で身体能力を高め、チームの能力を高めていくなれば、たとえ、運動部活動内で問題が起きたとしても、自治運営の改善を行い問題の解決へ向かうようにすれば、生徒の主体性は保障され、また、教師の負担も軽減されるだろう。このように、運動部活動の二つ目の方向性は、運動部活動本来の機能であるスポーツの高度化を目指すのではなく、普通体育のように、生徒の多様な身体の可能性を顕現するという理念を掲げ、生徒に自治権を与えようとするものである。確かに、二項対立の両項ともなる「教育」と「スポーツ」を「自主性」という概念が危ういバランスの上でつなぎ合わせているのが日本特殊的な運動部活動の存在様態である（中澤、2014）。しかしながら、自主性という概念は「放任」の問題を伴うことから不安定であり、子どもにただスポーツをさせておけばよいと思い込んでしまう可能性が伏在し、その不安定さに批判が向けられる。この点が「子どものスポーツ現場での、放任の問題がなかなか解決できない一つの理由」（中澤、2014、p.328）である。スポーツをしている子どもは解放されているのだから、そこに抑圧の問題は存在しないということになりかねず、世間で取りざたされている運動部活動の諸問題は解決に至ることなく、学校や教師の意識から抑圧の問題が消えてしまうことを懸念し、中澤は次のように述べている。「訓練論に対抗するはずの解放論の歯止めが機能しないため、抑圧の問題を潜在化させ加速させてしまう…解放論が、深刻で危険な逆機能を果たしてしまうのである。」（中澤、2014、p.328）スポーツと教育の論理の間になんとか中庸を見出そうとする方向性にも、解決しなければならない困難な課題が伏在すると思われる。



## 7. 結論

本研究では、佐藤の体育の概念規定に基づいて運動部活動の本質を究明することを目的として考察が進められた。その結果、教科体育と運動部活動は、共に「ヒトの身体面からの人間化」を実存的な目的とする体育実践であるが、全く別の実践形態をとることが明らかにされた。更に、運動部活動の本質は、生徒がダンスやスポーツといった運動文化に「馴致」し、更なる高みへ「超脱」することを契機としてスポーツが「高度化」することにあることが理解され、その後、運動部活動の在り方について二つの方向性が示された。

運動部活動研究は初に着いたばかりと言えるだろう。本研究は、今後ますます深められなければならない運動部活動研究の序説として貢献するものである。実りある議論が展開されるために、運動部活動の本質を踏まえることは重要である。中澤が看破したように、運動部活動は、学校教育と結び付いているからこそ、我々にとって身近なものであるが、そのことが噴出する問題の原因にもなっている。これらを解決するのは容易ではなく、多くの知恵を必要とすると思われる。本研究では、運動部活動の運営に関して言えば、「生徒の成長」と「スポーツの高度化」の間に中庸の道を見出せるかどうかは曖昧なままであり、今後の課題として残されたと言える。

### 注

- 1) 我々「人間」は自体的に人間であるのではなく、他の動物と同様、生物種の一つである「ヒト」としてこの世に生を受ける。ゲーレンは、他に例をみない特徴を持って生まれてくる「ヒト」を「欠陥生物」と規定した（ゲーレン、2008）。このような「ヒト」が「人間」となるには、世界内存在（ハイデッガー）として生きるという契機が必要である。カントの「人間は教育されなければならない唯一の被造物である（カント、1966、p.16）」という言葉は、教育の目的が「ヒトの人間化」であることを明示したものである。
- 2) ポルトマンによれば、人間の新生児は、たいへん発達し、機能も備わった感覚器官をもつ「巣立つもの」である。有蹄類やクジラ、サルも同様な状態で生まれてくるが、人間の新

生児は、人間特有の姿勢、つまり直立姿勢を保てるようになるまで、生まれてから約一年を要する。このことから、彼は、人間は未熟な状態から成熟しなければならず、能力の発達という観点からは柔軟性を与えられていると考えている（ポルトマン、1961、pp.60-66）のである。

- 3) 母親が歩き出そうとしている子どもを勇気づけたり、お辞儀の仕方を教えている行為を、佐藤は「全自覚的体育実践」と命名し、就学期における「自覚的体育実践」と区別している。どちらも体育実践であることに変わりはない（佐藤、1993、p.256）が、本論で体育と言う場合には後者を対象としている。
- 4) フランスのコーヌの森に一人きりで住んでいた野生児をヴィクトールと名付け、医者 of イタルは訓練を施した。この訓練により、触覚・味覚・嗅覚の3つは回復したが、視覚と聴覚にはあまり改善が見られず、言語についてはほとんど教育的効果が見られなかった。これらのことから、すべての人間は遺伝と環境の条件がともに複雑に働き合うことによって発達する（イタル、1952、pp.3-52、pp.109-120）例として紹介されることが多い。
- 5) 教育とは、洞窟内の住人にとっては教育者による外発的な「強制」である「魂の向け換え」と「真実性への上昇」のための技術であるとの前提から、「洞窟の比喻」で描かれている教育過程は、そのまま、我々の体育過程の形象化としても読み取ることが可能とされる（佐藤、1993、p.274）。プラトンの考える教育は「強制」である一方、自分の足で歩かないことには洞窟の外に出られないという意味で、人間（生徒）の内発的な主体性を前提としてもいる。このことから、佐藤は、プラトンにおける教育は、「魂のなかに知識がないから知識をなかに入れてやるのだ」（プラトン、1978、518C）といった考え方に代表されるような、教育を「無知の人への知識の伝授」とする通俗的理解とは、およそ隔たったものと言わねばならない（佐藤、1993、p.274）としている。
- 6) 内山は、運動指導者（コーチ）が持つべき「感性とは感受性というような受動的な意味合いではなく、環境とのかかわりの中で自己の存在を作り出していく能動的かつ創造的な能力であり、身体的自己と環境との相関的な関係が適切であるかどうかの価値判断を含む、認識能力と価値判断の能力（内山、2009、p.174）」であると定義づけている。

## 文献

- ・カント、I：尾渡達雄訳（1966）カント全集第16巻所収：教育学。理想社：東京。
- ・ゲーレン、A：池井望訳（2008）人間：その性質と世界の中の位置。世界思想社：東京。
- ・イタル、J：古武弥正訳（1952）アヴェロンの野生児。牧書店：東京。
- ・神谷拓（2016）生徒が自分たちで強くなる部活動指導：「体罰」「強制」に頼らない新しい部活づくり。明治図書：東京。
- ・文部科学省（2008）中学校学習指導要領解説：保健体育編。東山書房：東京。
- ・文部科学省（2013）運動部活動の在り方に関する調査研究報告書：一人一人の生徒が輝く運動部活動を目指して。
- ・中村雄二郎（1995）日本的スポーツ環境批判。大修館書店：東京。

運動部活動論再検討序説：佐藤の体育の概念規定に依拠して

- ・中西純司（2009）学校運動部活動改革のためのイノベーション戦略. 黒須充編：総合型知育スポーツクラブの時代. 創文企画：東京.
- ・中澤篤史（2011a）学校運動部活動の戦後史(上)：実態と政策の変遷. 一橋社会科学第3号. pp.25-46.
- ・中澤篤史（2011b）学校運動部活動の戦後史(下)：議論の変遷および実態・政策・議論の関係. 一橋社会科学第3号. pp.47-73.
- ・中澤篤史（2011c）学校運動部活動研究の動向・課題・展望：スポーツと教育の日本特殊の関係の探求に向けて. 一橋大学スポーツ研究30号. pp.31-42.
- ・中澤篤史（2014）運動部活動の戦後と現在：なぜスポーツは学校教育に結び付けられるのか. 青弓社：東京.
- ・日本体育協会（2004）これからのスポーツ指導者育成事業の推進方策.
- ・ポンティ. M.：竹内芳郎・小木貞孝訳（1967）知覚の現象学1. みすず書房：東京.
- ・ポルトマン. A.：高木正孝訳（1961）人間はどこまで動物か：新しい人間像のために. 岩波新書：東京.
- ・プラトン：田中美知太郎・藤沢令夫訳（1978）国家：プラトン全集11. 岩波書店：東京.
- ・佐藤臣彦（1993）身体教育を哲学する：体育哲学序説. 北樹出版：東京.
- ・内山治樹（2009）競技力の概念把握への方法序説. 体育学研究54(1). pp.161-181.
- ・友添秀則（2016）運動部活動の理論と実践. 大修館書：東京.
- ・八木崇仁（2007）学校運動部と競技団体の連携に関する一研究：学校運動部の地域移譲政策を手掛かりに. 2007年度早稲田大学院修士課程スポーツ科学研究科修士論文.